

検査項目の説明

検査項目		検査項目の説明
身体計測	身長	BMIは身長に見合った体重かどうかを判定する数値です 腹囲測定は血圧・脂質・血糖の結果値と合わせてメタボリックシンドロームの診断に用います
	体重	
	標準体重	
	BMI指数	
	肥満度	
	腹囲	
視力	遠方視力は5m視力、近方視力は50cm視力を測定します 種々の疾患や先天性異常・加齢・矯正器具の不備などにより異常値となることがあります 検査当日、眼鏡・コンタクトレンズをお忘れになった方は、裸眼視力での判定となります	
聴力	低い音（1000Hz）と高い音（4000Hz）の実施結果です 高齢の方は高音が聞き取りにくくなる場合があります 毎回所見のみられる方や既に疾患をお持ちの方は、放置していると悪化する恐れがありますので 詳しい検査または治療継続をしてください	
血圧	高血圧になると常に血管に負担がかかり内壁が傷ついたり、柔軟性がなくなり動脈硬化が 進行しやすくなります 脳卒中・心疾患・慢性腎臓病など様々な疾患の引き金になります	
肝機能	総蛋白	血液中の総蛋白が低値の場合は、栄養障害・ネフローゼ症候群・がんなどが疑われ、高値の場合は 慢性炎症や脱水などが疑われます 血清中の蛋白は大きくアルブミンとグロブリンに分けられ、2つの蛋白の比（A/G比）などの 増減をみることで全身の健康状態や疾患の有無を知ることができます
	アルブミン	
	A/G比	
	総ビリルビン	黄疸を調べる検査で、肝臓・胆道疾患・溶血性疾患などで上昇します
	直ビリルビン	
	AST (GOT)	肝機能の指標として最も一般的なものです 肝疾患の有無や経過観察の指標となります
	ALT (GPT)	
	ALP	肝臓・胆道系疾患の指標となります 小児及び成長期には高くなる場合があります
	LDH	急性肝炎・肝臓がん・心筋梗塞などで上昇します
	コリンエステラーゼ	肝臓で作られる酵素で、肝臓の状態をみることができます
γ-GTP	肝臓・胆道の状態をみることができます 主に薬剤性肝障害やアルコール性肝障害の指標となります	
ウロビリノーゲン	肝機能障害・溶血性貧血・腸閉塞などで陽性となります	
肝炎	HBs抗原	B型肝炎ウイルスの感染の有無を調べます
	HBs抗体	HBs抗原に対する抗体です 過去に感染したウイルスが排除された場合に陽性となります B型肝炎ワクチン接種後も陽性となります
	HCV抗体	C型肝炎ウイルスの感染の有無を調べます
	HCV-RNA	

検査項目		検査項目の説明
脂質	総コレステロール	血液中に含まれるすべてのコレステロールの総量です
	LDLコレステロール	悪玉コレステロールです。血管の内壁に沈着し、動脈硬化を促進させます
	HDLコレステロール	善玉コレステロールです。動脈に溜まったコレステロールを取り除く働きがあります
	中性脂肪	体内の内臓脂肪の主成分です。増加すると動脈硬化の一因となります
	nonHDL-C	総コレステロールからHDLコレステロールを除いたものです
糖代謝	血糖	血糖値は採血時の血糖レベル、HbA1cは過去1~2か月の平均的な血糖レベルを示します 高値の場合は糖尿病・膵臓疾患などが疑われます
	血糖	
	HbA1c (NGSP)	
膵	アミラーゼ	膵臓や唾液腺から分泌される消化酵素です。膵炎や耳下腺炎などで上昇します
	エラスターゼ1	膵臓から分泌される酵素です。膵臓がんの腫瘍マーカーとしても利用できます
筋心	CPK	心筋や骨格筋の状態を知ることができます。心筋障害や激しい運動の後でも高値となります
痛風	尿酸	痛風の原因物質として知られていますが、尿管結石や腎障害の原因となることもあります
腎機能	クレアチニン	クレアチニン・尿素窒素が高値の場合、腎機能異常を示し 低値の場合、肝不全や尿崩症が疑われます eGFRは腎臓からの老廃物を排泄する力があるかを示し、値が低いほど腎機能の低下を示します
	eGFR	
	尿素窒素	
	尿蛋白	陽性の場合、腎炎やネフローゼ症候群などの腎機能障害が疑われます 生理・発熱・激しい運動などで陽性となることがあります
	尿潜血	陽性の場合、腎臓や膀胱などの尿路系疾患が疑われます 生理・激しい運動などで陽性となることがあります
	比重	低値は尿崩症・腎不全などが疑われます。高値は糖尿病・心不全・脱水などが疑われます
	赤血球	尿中の固形成分の有無により、腎臓や尿路系疾患が疑われます
	白血球	
	扁平上皮	
	硝子円柱	
	顆粒円柱	
	細菌	
	糸球体型赤血球	
電解質	ナトリウム	体内の水分量やpHを一定に保ち、神経の伝達や心臓・筋肉を動かすことに深く関わっています 異常がみられる場合には、腎機能低下やホルモンの働きに異常がある可能性があります
	カリウム	
	クロール	
	カルシウム	
	リン	
	マグネシウム	
リウマチ	RF	リウマチ因子の有無を調べます リウマチ以外にも高値となる疾患があるため自覚症状と合わせて診断されます
炎症	CRP	体内で炎症が起こった時に高値となります。白血球や他検査と併せて炎症の程度を判断します
梅毒	RPRテスト	梅毒の感染の有無を調べます。RPRは梅毒以外でも陽性となることがあります
	TPHA定性	

検査項目		検査項目の説明
血液一般・血清鉄	白血球	体内に炎症が起きている時に上昇します
	赤血球	貧血や多血症等の診断指標とし、その組み合わせにより貧血の種類を識別することが可能です
	血色素量	
	血球容積	
	M C V	
	M C H	
	M C H C	
	血清鉄	
	血小板数	高値で血が固まりやすく、低値では血が止まりにくくなります
	桿状核球	血液中の白血球の種類を調べます。健康な状態での割合はほぼ一定のため、割合の変化から疾患を推測することができます
	分葉核球	
	好中球	
	好酸球	
	好塩基球	
単球		
リンパ球		
腫瘍マーカー	C E A	大腸・胃・肺・乳がんで高値を示します 喫煙・炎症性疾患・肝硬変・糖尿病でも高値となることがあります
	C A 19-9	膵臓・胆道・胃・大腸がんなど主に消化器がんで高値を示します
	C A 125	卵巣・子宮体がん、その他膵臓・胃・大腸がんなどで高値を示します 子宮内膜症・妊娠・月経・肝硬変・膵炎などでも高値となることがあります
	P S A	前立腺がんで高値を示します。前立腺炎・前立腺肥大症でも高値となることがあります
	A F P	肝臓・卵巣・精巣がんなどで高値を示します。慢性肝炎・肝硬変・妊娠などでも高値となることがあります
	C Y F R A	肺の扁平上皮がん・頭頸部腫瘍などで高値を示します
甲状腺	T S H	甲状腺機能亢進症・甲状腺機能低下症などの甲状腺疾患の診断に用います
	F T 4	
	F T 3	
大腸	便潜血	大腸がん以外にも、痔・ポリープ・出血性腸炎などで陽性となる場合があります
骨塩量	骨密度	骨の密度から骨粗しょう症のリスクを調べます。もっとも骨量が多い時期（22～24歳）の骨密度の平均値を100%として、現在の自分の骨密度が何%であるかを比較した数値です
	対若年比	
A B C 検診	ピロリ抗体	ヘリコバクターピロリ菌に対する抗体を調べます
	ペプシノーゲン	胃粘膜の萎縮の広がりとその程度・胃液の分泌機能・胃粘膜の炎症の有無を調べます
	A B C 検診	ピロリ菌に対する抗体と胃粘膜萎縮度を反映するペプシノーゲン、2つの結果を組み合わせることで4群に分類し、胃がんのリスクを判定します
眼底	KW	高血圧性変化や動脈硬化性変化の程度が分かります 目の奥の血管や網膜の様子から緑内障・白内障・眼底出血・網膜剥離など様々な目の疾患の診断に用います
	SS	
	SH	
眼圧	右	低値は網膜剥離・虹彩毛様体炎などが疑われます。高値は高眼圧症・緑内障などが疑われます 眼圧が正常でも緑内障などの眼疾患が疑われる場合があります
	左	

検査項目		検査項目の説明
心臓	心電図	心臓で生じる電気信号を捉えて心筋梗塞・不整脈などの心機能異常の有無・程度を調べます
	心拍数	1分間に心臓が拍動する回数です
	NT-proBNP	心臓の機能が低下して負担が大きくなるほど高値を示します
乳房		X線や超音波を用い、乳がんの発見や乳房疾患の有無を調べます
胸部X線		肺や縦隔を観察し、肺がん・肺結核・肺炎・肺気腫などの肺病変や縦隔病変を調べます
肺機能	努力肺活量	間質性肺炎や肺線維症などの肺が固くなる疾患・閉塞性肺疾患・気管支喘息などで数値が低下します
	%努力肺活量	
	1秒量	
	1秒率	
	%1秒量	
上部消化管		X線造影検査や内視鏡検査で上部消化管（食道・胃・十二指腸）疾患の有無を調べます
超音波	腹部	肝臓・胆のう・膵臓・腎臓・脾臓などの病変の有無・程度を調べます
	甲状腺	甲状腺の病変の有無・程度を調べます
子宮	子宮頸部細胞診	子宮頸がんの発見や子宮や卵巣に異常がないか調べます 細胞診では子宮頸部の細胞を採取して検査し、ベセスダ分類に沿って判定します
	内診 経膈超音波	

判定基準	A	異常なし	
	B	軽度の所見がありますので経過を見てください	
	C	0	年1回の再検査や生活習慣の見直しによる経過観察が必要です
		1	生活習慣の見直しと6ヶ月後の再検査による経過観察が必要です
		2	生活習慣の見直しと3ヶ月後の再検査による経過観察が必要です
		X	今回の検査では判定できませんでしたので再検査をお勧めします
	D1	医療機関での治療と生活習慣指導の開始を要します	
	D2	精密検査を受けてください	
	E	現在の治療を継続してください 現在、経過観察中の項目は主治医の指示に従ってください	

【治療中・経過観察中の疾患がある方へ】

今回お送りした報告書には、治療中・経過観察中の疾患が反映されない検査項目もあります

この報告書はかかりつけ医に受診の際、ご提示ください